

## 筑波山地域ジオパーク現地審査報告書

【日程】2014（平成26年）7月18日（金）～19日（土）

## 【審査員】

中田節也（日本ジオパーク委員会副委員長）

宮原育子（日本ジオパーク委員会委員）

野辺一寛（現地審査員、隠岐ジオパーク）

## 【主な参加者】（所属）

市原健一（筑波山地域ジオパーク推進協議会会長：つくば市長）

田中泰一（筑波山地域ジオパーク推進協議会副会長：筑波山神社宮司）

小玉喜三郎（筑波山地域ジオパーク推進協議会理事：産業技術総合研究所特別顧問）

岡田久司（つくば市副市長）

小池 渉（茨城県自然博物館学芸員）

野末たく二（（有）結エディット代表取締役）

矢野徳也（自然公園指導員）

吉武和治郎（茨城県環境アドバイザー）

金田玄一（ジオネットワークつくば・ジオマイスター）

野村眞一（NPO 法人つくば環境フォーラム）

田崎 徹（石岡市副市長）

久須美忍（笠間市副市長）

橋本正男（笠間市市長公室長）

井上高雄（桜川市副市長）

小泉祐司（土浦市副市長）

水田和広（土浦市市長公室政策企画課主任政策員）

中尾麻由実（土浦市市長公室政策企画課主事）

相崎守弘（茨城県霞ヶ浦環境科学センター長）

高田正澄（NOP 法人ネイチャークラブにいはり代表理事）

石川眞澄（かすみがうら市副市長）

大久保隆史（かすみがうら市生涯学習課市民学芸員）

桂木郁夫（かすみがうら市郷土資料館市民学芸員の会）

宇野房子（かすみがうら市郷土資料館市民学芸員の会）

深井征一郎（かすみがうら市郷土資料館市民学芸員の会事務局長）

遠藤雅樹（雪入探検隊）

宮田憲一（雪入探検隊）

柴原利継（筑波山地域ジオパーク推進協議会事務局長：つくば市ジオパーク推進室室長）  
伊藤祐二（筑波山地域ジオパーク推進協議会事務局長：つくば市ジオパーク推進室主任主査）  
霜越彩美（筑波山地域ジオパーク推進協議会事務局長：つくば市ジオパーク推進室主事）  
寺門克弥（筑波山地域ジオパーク推進協議会事務局長：つくば市ジオパーク推進室地球科学  
専門員）

## 現地審査のまとめ

### 1. ジオサイトと保全

筑波山塊の主峰である筑波山は広大な関東平野の北東部に位置し、広範囲から独特の山稜を望むことができ、朝夕には山肌の色を変えることから、紫峰とも称されている。筑波山の山頂部は斑れい岩によって急峻な双峰を成し山腹から山麓にかけては花崗岩が分布してその上を岩屑物が広く覆っているためゆるやかに裾をひく美しい山容を有している。これらの深成岩類は約 7500～6000 万年前に地下 10km の地球内部で起こったマグマの活動が作りだしたものである。一方、その周辺地域は第四紀の地球規模の気候変動に伴う海水準変動が広い台地や低地を造り出し、霞ヶ浦の風光明媚な風土と景観をもたらしている。

また、筑波山は、古代から「西の富士、東の筑波」と称される関東のランドマークとして山岳信仰や多様な文化・芸術発祥の舞台となってきた。さらに、霞ヶ浦の水運を利用し江戸（東京）と隣接した立地条件によって石材業や陶芸などが栄え、独自の発展を遂げるとともに日本の近代文化を支えてきた。

このような歴史的背景と地質資源によって「紫峰と霞ヶ浦のジオが紡ぐ悠久の歴史と未来へ引き継がれる人々の暮らし」をテーマとして、地質的な資源だけではなく、文化的、生物学的な資源やレンコンなどの特産品を含め様々な見どころのジオサイトがある。また、こうしたジオサイトの一部は、水郷筑波国定公園、県立公園、文化財などに指定され保護されるとともに、各地域の NPO によって保全活動が進められている。特に「雪入ふれあいの里公園」は、かつての採石場の一部を自然公園として整備し自然観察会などに活用しており、採石場としての稼働後の保全と活用という面では、他ジオパークの見本となるものであった。

しかしながら、稼働中の採石場をジオサイトに選定し、露頭を活用しているトライアル練習場をジオサイトの候補地としており、ジオパーク活動の理念についての認識不足やジオサイトを選定する上での地質資産保全との関係性が曖昧となっている。さらに、ジオサイトとジオサイトをつなぐストーリー性も不十分であり、「地下 10km と海拔 0m の神秘」というサブテーマとともに、地域の特徴を分かりやすく表現することに成功していない。

当該地域の関係者がジオパーク活動の理念を理解することを強く望むが、ジオサイトのストーリーやゾーニングなどを再検討することによって魅力あるジオパークとなる可能性は大いにある。

### 2. 教育・研究活動

当該地域には、産業技術総合研究所をはじめとして 24 の国の研究機関と霞ヶ浦環境科学

センター、市立博物館などの施設があり様々な調査研究と教育活動が行われている。

また、各自治体や地域内の NPO などによる環境保全活動も積極的に行われており、小中学校などの教育機関との連携も進められている。

しかしながら、こうした活動はそれぞれの機関が独自に行っているものであり、ジオパークという 1 つのつながりにおいての取り組みとなっていないため、それぞれの研究活動や教育活動が筑波山地域ジオパークへ有機的に還元される仕組みとして位置づけられることが望まれる。

### 3. 管理組織・運営体制

筑波山地域ジオパーク推進協議会は、協議会を構成する 6 市の市長と筑波大学副学長、筑波山神社宮司、産業技術総合研究所の名誉リサーチャーである小玉氏、加藤氏によって組織されており、その下に関係する機関の担当者からなる幹事会が設けられている。事務局は会長が所属する機関に置くこととしており、つくば市役所のジオパーク推進室が協議会の事務局を受け持っている（室長が事務局長を兼務し、推進室の職員 2 名と地球科学専門員の 1 名が事務局員を兼務）。

さらに、協議会の下には地域住民や NPO などを中心とした「市民活動部会」、商工観光関係者による「地域振興部会」、各独立法人の研究機関職員や筑波大学の教授、博物館職員、NPO 法人からなる「教育・学術部会」が組織されているが、それぞれの部会が平成 26 年 6 月末に設立されており、部会長も決まっていなく、筑波山地域ジオパーク推進協議会としての実質的な活動はまだなされていない。なお、協議会の総会に出席できる会員には、前述した 6 市の市長と 4 人の関係者のみのため、各部会からの声が総会で直接取り上げられるような運営体制になることを望みたい。

また、つくば市以外の市では、企画政策課、商工観光課などがそれぞれのジオパークの窓口となり市の総合振興計画にも盛り込まれているが、市役所内の横断的組織の設立と各市が主体となった取り組みを期待したい。

協議会運営費の財源は参画する自治体の負担金によって賄われており、ガイド養成、広報宣伝費、ウェブサイトの運営管理費などにあてられている。ジオパークに関連したハード整備（歩道、拠点施設など）については各自治体で実施することとしているが、協議会自体の運営費が 120 万円程であり、今後増額要求をするとのことである。ただ、協議会の財務計画は平成 25 年度と平成 26 年度の 2 カ年についてしか記載されていないため、看板整備など今後計画的なジオパーク活動を推進する上でも 4 カ年または 5 カ年の財務計画と事業計画の策定が望まれる。

日本ジオパークへの認定は日本ジオパークのネットワーク活動に参加する事を求められるものである。地域内におけるジオパーク活動は積極的に進められているが、既存の日本ジオパーク地域との交流がほとんど実施されていない状況である。ジオパークの管理・運営体制、ガイド養成、教育活動などについて先行地域と交流し、それらの経験を活用すべきである。

#### 4. 地域の持続可能な発展とジオツーリズム

持続可能な発展とジオツーリズムの推進のためには、地元企業によるジオ関連商品の製造と販売およびガイド付きジオツアーの実施が求められるが、筑波山地域では日本酒、みかん、クリ、レンコン、お菓子（小判石）、陶芸品など既に地元企業による特産品が数多く作られている。こうした産品をジオパークでつなげることによって、筑波山地域が一体となり更に価値が高まるものと期待できる。

ジオツアーを引き立たせるガイドについては、ジオマイスターや観光ボランティアガイドの養成など既に取り組みされておりそれぞれの地域でガイド組織が設立されているが、各拠点施設でのジオパークの解説やジオサイト解説看板なども含め、まだ筑波山地域全体の特色を理解しジオパークとしてつながりを持った取り組みとはなっていないため、協議会の名称やロゴマークの掲示など、出来るところからジオパークとしてのつながりを作っていただきたい。

また、筑波山ジオパークとして構成自治体が一体となって取り組むとともに、既存の花火大会や祭りなどとの連携によって各自治体の歴史・文化、暮らしを全面に出した魅力のあるゾーニングができるので、それぞれの地域を周遊するジオツアーの構築を期待したい。

#### 5. 国際対応

当該地域の中心をなすつくば市では、国の研究機関もあることから外国語対応が行われているが、博物館や野外看板、リーフレット、マップ、ホームページなどの外国語対応は遅れている。研究学園都市もあり首都圏からのアクセスも良いことから、今後ジオパークを目的とした外国人観光客も増加する可能性があるため、随時外国語対応を進めてもらいたい。

#### 6. 防災・安全

防災の面については、筑波山中腹における土石流の解説看板は設置されているが、地震についての対応がなされていないので、今後は地震についての安全対策も進めていただきたい。

#### 7. 結論

筑波山地域ジオパークには魅力ある資源と様々な研究機関や多くの市民活動が行われている。また、博物館や環境科学センターなどの拠点となれる施設も数多く点在しているが、ジオサイトとして稼働中の採石場や露頭を活用しているトライアル練習場を選定するなど、ジオパーク活動の基本理念である地質資源の保全という観点の理解不足が見られる。

また、当該地域はその範囲が広いことと、「地下 10km と海拔 0m の神秘」というサブテーマによって、一般の方に筑波山地域ジオパークの魅力が伝わりにくくなっている。

当該地域の関係者がジオパーク活動の理念を理解することを強く望むが、ジオサイトの選定見直しとストーリーやゾーニングなどを再検討することによって魅力あるジオパークとなる可能性は大きい。

以上のことから、ジオサイトの選定見直しと、サブテーマの見直し、ゾーニングによるジオストーリーの組み立てによる周遊性のあるジオツーリズムの構想の作成、および、これらを保証する管理・運営体制の整備を条件として、筑波山地域を認定保留とする。